

# 「竹」造形素材としての可能性

大阪芸術大学 工芸学科 教授 長谷川 政弘

私の造形作品の表現素材は、主に金属であるが、2017年から2022年までの7年間、奈良県生駒市高山竹林園で開催された「高山竹あかり」にて竹の造形物のデザインと制作を行い、竹を造形素材として扱ってきた。竹林園のある高山地区は、日本で唯一の茶筌の産地であり、ほぼ100パーセントに近い茶筌がこの地区で生産され日本の茶道文化を支えてきた。

この「高山竹あかり」は、生駒市と高山竹あかり実行委員会によって毎年開催されており、今回で27回目となる。高山竹林園(約2.7ha)全体に200本以上の真竹を使って大型造形物を制作し、約3000本の水ロウソクや松明でライトアップして2日間で3000人以上の観客が訪れるイベントである。

竹は造形素材として私の普段扱う金属と材質的に異なる所が多いが、似た性質も持っている。本研究は金属造形作家の視点から、竹の造形素材としての可能性を探ってみたい。以下「高山竹あかり」の特色を上げる。

1) 竹の造形物をライトアップするイベントは、全国各地で開催されている。その多くがイベントの演出の一部になっているが「高山竹あかり」は、あくまでも竹の造形物のライトアップが主役のアートイベントである。

他で開催される竹あかりイベントのほとんどが防火上の制約やあかりが消えない理由からLEDライトを使用しているが、ここでは自然の炎の揺らぎにこだわり、メインの光源として水ロウソクを使用している。

2) 私が描いたデザイン画をもとに、高山地区内の地元業者が組織する「茶筌組合」と「編み針組合」が分担して私の指導のもとで制作する。

普段手に収まるサイズの中で緻密な作業をしている茶筌職人と、今では機械で作業を行なっている編み針職人と一緒に1本5メートル、200本の真竹を前にしてどうやって制作するべきかを毎回試行錯誤しながらの共同作業である。

3) 竹は伐採すると徐々に変色が始まる。真竹の美しい青竹色と内部の薄橙色をそのまま作品に生かすために何ヶ月も前から時間をかけて制作することができない。制作は1~2日間、現場での設営は、ほぼ1日と驚くほどの短期間で造形物を完成させなければならない、特に設営現場では即興性と臨機応変な判断が求められることになる。

こういった背景や制約を踏まえた上で、園内7箇所の空間を想定して造形物のデザインをした。竹を扱うパターンは大きく次の三つのタイプに分けられる。

- A 竹の形はそのまま、必要な長さで切って使う。
- B 竹を縦割りにして平板材として使う。(主に8分割)
- C 竹の一部はそのままを残し、途中まで割って使う。

竹と鉄の素材としての類似点は、パイプ構造では縦方向の圧力には強い。横方向の圧力に対しては、しなやかにカーブを描く。それは竹の縦割り(8分割)にしたものや金

属の長い平板材も同様である。ただ異なる点は、竹は曲げが限界に達すると折れてしまうが、限界まで弾力性を保ちながら美しいカーブを描く、金属は折れることはないが限界を越えると部分的に曲がってしまう。そして竹のような弾性は無くなってしまう。竹の造形素材としての最大の魅力はこの弾性が生み出す曲線にあると私は思っている。

そしてデザインをする上で、竹の外側と内側どちらを使うかで作品の印象が大きく変わってくる。それはライトアップすると著明に現れる。表側は美しい青竹色を輝かせるのに対し、内側は光を優しく吸収し、竹の節目を反射させキラキラと輝き非常に美しい表情を見せる。以下、7箇所の展示場所に合わせた造形物の形態をタイプ別に分類した。

- ①鷹山橋:C 公園に入る橋の欄干に取り付けるために竹のシャープな直線性を活かしたものにした。少し高さを変えて2タイプ制作した。
- ②入り口階段と植え込み:B 傾斜した植え込みから輪が転がってくるようなイメージの作品。
- ③円楽寺跡:C 竹の下方だけを8分割にして円形に広げたものを4種の高さで制作。正三角形に配置したシャープな作品。
- ④芝の広場:AとB 奥行きのある縦長の大きな空間。波間に何艘もの舟が浮かび、多目的広場に向かって導線的なインスタレーション作品。
- ⑤多目的広場:BとC 園内最大の大きな空間。2種類の大型作品を数多く配置したインスタレーション作品。一つは5メートルの竹を2メートル残したところで8分割しそれを放射線状に開き、もう一度根元に集めて縛りハート型にした作品。もう一つは竹を縦に8分割して4列につないで幅を持たせたものを何回か丸めたダイナミックなリング作品。何点も連続で配置すると螺旋状の美しい空間が生まれた。
- ⑥資料館前階段:AとB 多目的広場につながる階段の両脇の手摺りに設置。節の間にポケットや穴を開けて水ロウソクのあかりを内包させる。動きを出すために穴にヒゴ状にした竹を差し込み巻き付けた作品。
- ⑦園内通路:A 「ごぼんつ」と呼ばれる竹を30cm程度で斜めにカットしたものの中に、水ロウソクを入れて通路両脇に配置し足元を照らし園内散策の導線をつくった。カットをV型にすると切り口がハートに見える効果がある。

「高山竹あかり」の特徴は、いくつかの制約の中から独自の竹の扱いが生まれて来た。竹細工のように工芸的で緻密な作業を竹に施すのではなく、制作時間を多く取れないという制約を逆に生かし、竹自体にあまり加工を加えず竹の弾性をうまく利用し、竹の描く美しい曲線そのものを生かした彫刻的造形作品だと言えよう。この弾性こそが竹の造形素材としての最大の魅力と言える。